

NEWS FID+

CONTENTS

授業レポート

「生理学実習」理学療法学科 西井 康恵	1
「慢性期看護学援助論Ⅰ」看護医療学科 山本 裕子	2
「栄養教育論実習」健康栄養学科 宮前 眞智子	4
「建築施工」人間環境デザイン学科 吉永 規夫	5
「英語コミュニケーション演習B」現代教育学科 福島 玲枝	6
FD研修会レポート	8
2024年度FD活動報告	10

授業レポート

「生理学実習」

理学療法学科 西井 康恵

生理学実習は日程としては1回生後期に全7回、1回に3コマ(3、4、5限)連続の実習です。1～6回目で6項目を実施し、最終7回目は発表会です。1回生、約80名を6グループに分け、1グループ13名前後で実施しています。項目としては①神経活動電位、②筋収縮、③血圧・心音、心電図、④呼吸循環(肺活量測定など)、⑤皮膚感覚(2点弁別)そして⑥血球の観察です。定期試験は行わず、6回分のレポートと発表会でのスライドや質問内容等から成績評価をしています。各項目1または2グループに分かれて教員1名が実習指導を行うスタイルです。



血液については、生理学Ⅰで前期(4月)に講義をしています。実習授業開始時にそのスライドを用いて学生に質問しながら復習をする時間を設けています。講義の際には、血球の形態について、その区別ができるようにまでは説明していません。そのためスライドの後半では、実習で使用する血液塗抹標本の顕微鏡写真を使用して、イラストでしか見たことのない血球が実際にはどのような色に染色され、どのように見えるのか説明しています。また、学生が顕微鏡の操作に慣れることよりも、血球の観察に集中できるようにした状態で実習を開始しています。



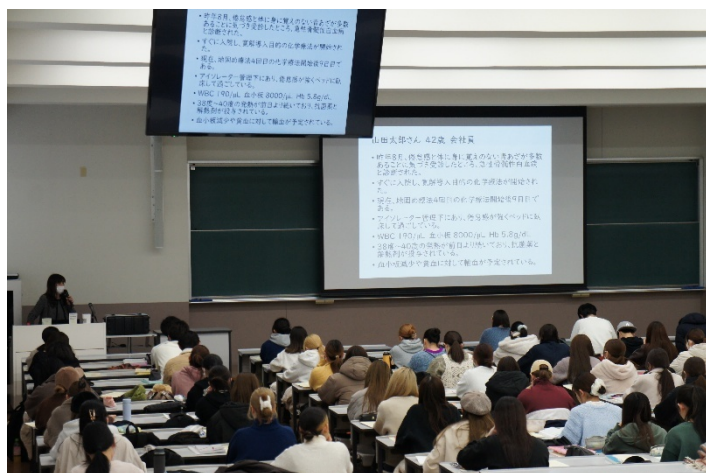
つまり、実習開始前に対物レンズは強拡大(40 倍または 60 倍)でピント合わせした状態、かつ典型的な形態をした白血球が視野に入る状態にしてあります。そうすることで、スライドで血球の形態の説明を聞くと同時に、学生は実際に顕微鏡で見る血球も確認できる状態です。過去には、焦点合わせからを実習としていましたが、対物レンズを下降させる加減がわからないからか、下降させ過ぎてスライドガラスが割れたことが複数回あり、標本の破損予防の意味もあります。実習課題としては、白血球の識別をすることと、赤血球と白血球の比を求めることです。1 回生にとっては初めての实習、初めてのレポート、ということもあり、結果に何を記載するのか、考察では何を調べるのか、かなり丁寧な説明を心掛けています。人数が少ないこともあり、特に、確実に結果を得られるように実習中には全員に話しかけ、白血球が正しく識別されているか確認しています。顕微鏡画像はスマホで撮影させて画像をレポートに貼付させています。実習時間内にスマホの画像を私に見せて確認するように、と指示も出していますが、学生が何かを見つけたタイミング(例えばこれは好中球で合っているかと考えている時)にすぐ質問できる雰囲気づくりも心がけています。



白血球を 100 個見つけて識別し、白血球分画を求める、あるいは好中球を各分葉ごとにカウントして左方・右方移動がみられるか計測する、など、もう少し実習内容を追加、発展させたいところはあるのですが、そこまでの集中力、モチベーションを求めるのは難しい様子です。この度は研究授業という貴重な機会を与えていただき、また授業検討会では、先生方が授業や実習で工夫されている点を紹介していただき、感謝申し上げます。今後の実習内容を再度検討し、改善していきたいと思えます。ありがとうございました。

「慢性期看護学援助論Ⅰ」

看護医療学科 山本 裕子



慢性期看護学援助論Ⅰは、看護医療学科2年生を対象として、慢性経過をたどる疾患を有する患者の看護について、系統別に代表的な疾患を取り上げ、講義をしています。これは2年次前期の成人看護学対象論から3年次前期の慢性期看護学援助論Ⅱ、後期の成人慢性期看護学実習へと段階的に知識・技術を積み上げていく中で、特に疾病・治療・看護の知識基盤を養う科目として位置づいています。

本科目では看護学生のバイブル的な医学書院の系統看護学講座成人看護学シリーズを教科書とし、word で作

成した講義資料を配布、パワーポイントにより講義を進めています。また、出席カードは厚手のカラーA4 用紙両面に 15 回分の枠を設け、質問・コメントを書き込めるようにし、授業の終了時に回収、次回開始時に返却するという往還を行っています。さらに、講義では事例を提示して、自分が看護を実践するならばというイメージを持てるようにしたり、講義内容に関連する動画を YouTube 等からみつけて理解を促したり、該当する疾患の病棟で実習した 3 年生にコメント動画を撮影させてもらい、科目の重要性を示すなどの工夫を行っています。

今回の研究授業では「血液・造血器疾患」を取り上げました。本学では、大阪府・奈良県下の先端医療を担う病院で慢性期看護学実習を行っており、多い年度では学年の 1/3 の学生が血液内科病棟での実習を経験しています。そのため、実習で充実した経験や学びができるように基本的な知識をしっかりと修得してほしい思いで講義を行っています。一方で、血液・造血器疾患は日常的な疾患ではないため、患者をイメージすることが難しく、解剖生理や病態の理解も容易ではありません。



そこで、今回、タイムリーに封切られた映画「はたらく細胞」の一部の YouTube 動画を紹介しました。「はたらく細胞」は漫画を原作とし、急性白血球をテーマに扱った映画です。限られた講義時間で割ける時間として 5 分以内の動画を探し、血球の働きを 3 分半程度で歌で紹介している動画を授業の冒頭の血球の説明の際に流して、興味を喚起しました。学生の感想にも「はたらく細胞の動画で興味がわき、集中できた」というものがありました。映画をすでに視聴した学生もおり、映画の内容と照らして理解が進んでいたようでした。

さらに、白血病の与える社会的イメージを伝えるために、白血病に罹患した有名人を紹介しました。特に、学生との年齢も近く、近年話題になった水泳の池江璃花子選手については、身近に感じられたようでした。そして、授業の最後に、白血病の看護についてまとめる形で一昨年、血液内科病棟で実習した学生に作成してもらった「血液内科病棟での看護の実際」のパワーポイントを数枚紹介しました。これにより教員が説明した看護について、実際に先輩たちも経験し、自分たちも実践するかもしれないと自分に引き寄せて考えてくれたのではないかと期待しています。

授業検討会には、12 名の教員が参加し、実習との関連づけや動画の利用、池江選手など具体例の提示の工夫等について、肯定的な評価をいただきました。その後、各科目でされている工夫についても意見交換を行いました。

さらに、今回、2 年生対象の看護専門科目の授業に参加していただくことで、専門基礎科目や基礎看護学との関連について理解できたという意見を頂戴し、看護医療学科のカリキュラムについて相互理解を深めることが重要であると思いました。また、このように様々な教員の視点から学び合うことは、教育改善において意義があると改めて実感し、今後も研究授業や学科内の FD 等を通して、検討を重ねていきたいと思いました。最後に、研究授業、および授業検討会にご参加いただきました先生方、撮影いただきました職員の皆様方に深く感謝申し上げます。



「栄養教育論実習」

健康栄養学科 宮前 眞智子

「栄養教育論実習」は、健康栄養学科 3 回生前期に開講している必須科目です。栄養教育とは、教育的手段を用いて人々の健康の保持増進、疾病予防・治療、適正な食行動への是正、食を介した QOL の向上を目指し、食料生産から食品の安全の確保、食品の適正な選択を通じて、食を営む力を培うための支援を行うことをいいます。



「栄養教育論実習」の到達目標は、個人及び集団に応じた栄養教育に必要な教材等の資料の作成・実施・評価ができること、個人及び集団を対象とした栄養教育計画の企画・運営・実施・評価ができることです。したがって、本実習は、1、2 回生で学習した「栄養教育論 I 及び II」の基礎知識と「栄養教育論演習」での栄養教育を行うための基礎的な力を活用し、対象となる個人及び集団に対して、模擬栄養教室等の実施や栄養カウンセリング等の模擬的な体験実習を通して、実践的指導力の形成につながることを目的としています。

授業計画は、2 コマ続きの 12 回実施しています。1～2 回では PC を活用した教材等の作成、3～8 回は集団の栄養教育マネジメント、9～12 回は個人の栄養教育マネジメントを計画しています。今回の研究授業は、第 11 回の個人の栄養教育マネジメント「病室訪問のシミュレーションによる栄養教育」です。3～4 人の少人数によるグループ学習の形態をとり、テキストで設定している架空の入院患者に対して、実習生としての接し方等の留意点やアセスメントの内容などをベッドサイドで行うことを意識したロールプレイ(模擬実習)を行いました。テキストには、入院患者の情報や看護師情報などが示されていることから、それらの情報も参考にします。

ロールプレイは 3 回行い、それぞれの回で役割を交替するようにしました。また、個人の栄養教育マネジメントでは、予習の意味を含めた自宅学修を毎回課すことにしており、今回は、入院 3 日目、5 日目、9 日目の入院患者に対する声掛けや栄養教育プランを考えて授業に臨むことにしていました。なお、毎回のグループ編成は、無作為抽出により授業担当者が指定しています。よって、学生は授業が始まるまでグループの構成員は全く知らない状況です。また、授業前には、OpenCEAS に授業資料及び課題レポートを配信しています。授業では、まず、グループ内の役割(患者役、実習生役、記録役兼指導管理栄養士役など)を決め、各自で考えてきた内容をロールプレイします。そして、学生自身の気づきや感想を課題レポートに書き留





めていくという流れです。その間、授業担当者は、グループ内を机間巡視し、学生からの質問に対応します。また、学生は、グループで意見の交換など自由にディスカッションしてよいこととしていることから、活発なディスカッションが行われています。

授業における工夫点は次の6点です。①助手との連携による授業運営となることから学修指導略案を作成し共通理解を図っていること。②授業前に授業資料や課題レポートを配信し、自宅学修を課していることから予習がしやすい環境にしていること。③持参を推奨する参考テキストを紹介していること。④少人数のグループ編成にすることにより、意見交換がしやすい環境にしていること⑤ロールプレイについては時間的な制限以外はグループ及び学生の主体性を重んじていること。⑥グループの構成員は授業直前にわかるので緊張した面持ちで授業に臨むことができることです。これらの工夫点は、研究授業後の検討会において様々な先生からご指導いただいた意見を取りまとめた内容であり、私自身の気づきとなりました。

最後に、この研究授業を通して、たくさんの指導や助言をいただき、授業の運営や学生主体の授業の在り方を再認識する機会になりました。関係の皆様に感謝申し上げます。

「建築施工」

人間環境デザイン学科 吉永 規夫

本科目は3年生後期の配当科目で、建築・まちづくりを学ぶ学生が受講する科目です。建築士資格にも関係してくることから、インテリアデザインコースの学生の受講も多いです。学生の多くは設計職を志望していることが多く、「施工」というと、少し遠い存在のように感じている学生が多いですが、設計した建築（インテリアも）は必ず施工というもののづくりを経てカタチになっていきます。良いデザインも良い施工が必須です。

第1回ではガイダンスを行い、全15回で全ての建築施工の工程を修得する授業計画を組み立てています。初回のガイダンス時に、「施工という着眼で学内の気になる場所を探す」というレポートを書いてもらいました。

これまで3年間でそのような視点で建築・街を学生は見てこなかったもので、学生には良い刺激になったと聞きました。また、毎回の授業の冒頭で、現在進行中の建築現場の写真を見せるようにしています。1つは鉄骨のビルの施工現場で、大きな建築のため、土工時、基礎工事が日々変わり映えしない中進行している状況ですが、「建築施工」で一番大切である「安全」ということを生身の現場写真から学生に伝えるようにしています。もう1つは九州で取り組んでいる新築工事の木造住宅で、こちらは先日上棟したこともあり、小さな建築ですがダイナミックな大工さんの手仕事を通じて、「建築施工」の魅力を伝えています。

研究授業では、「屋根工事」という項目で行いました。教科書ではわずか2ページしか扱われていない工事区分ですが、屋根は建築を構成する非常に重要な工程です。私がこれまでに実践してきた、「興善寺本堂屋根葺替え工事」、「檜野埼灯





台旧官舎改修工事」、「高野口小学校校舎改修」の屋根工事に関して講義しました。興善寺本堂は元禄 3 年(1690 年)に再建された地元谷川瓦の葺き替え工事事例で、取替率を 30%以下に目標を設定し、素屋根をかけないで野地合板・ルーフィングを用いた改修の実践です。300 年以上継承されてきた瓦をこれから 100 年以上維持する建築技術です。樫野埼灯台旧官舎改修工事では、痕跡をいかに残すかをテーマとした全体改修の中、明治 3 年(1870 年)の竣工当初の屋根根形状が陸屋根・鉛葺きであった痕跡を発見し、当初を再現した図面を作成しています。昭和 12 年に建てられた高野口小学校校舎改修では、50%以上の瓦の再用に挑戦し、小学校としての構造面、温熱環境面の性能を高めた上で、小

学校として使い続けられていて、地域の景観を遺し、国の重要文化財として指定されています。これらの実践事例は古いものをいかに残すかがテーマですが、それはこれから新しく作るという行為にも通じるところがあります。また、令和 4 年から改正された、「瓦屋根の緊結方法」の強化に関しても従来からの基準の変更点などを講義で紹介しました。建築の魅力の1つである作るという行為の「建築施工」を私の実践の事例を通じて学生に伝える授業を日々行っています。

後日の授業検討会では、設計実務を日々実践している私ならではの授業の濃度や事例を紹介している点を高く評価いただきました。また座学の授業で学生に「300 年以上前の瓦を実際に触らせる」ということを行うとより学生の興味も広がりより良くなるという貴重なアドバイスもいただき、今後の「建築施工」の授業の向上につながるご助言を頂戴し、大変参考になりました。日々変化していく施工を生きた言葉で今後も学生に熱意をもって指導していければと思います。

最後になりましたが、本学に着任して初めての研究授業でしたが、お忙しい中ご参加いただきました教職員の皆さまに心より御礼申し上げます。



「英語コミュニケーション演習 B」

現代教育学科 福島 玲枝

「英語コミュニケーション B(1Ea)」は、1 年次後期に開講される全学必須科目です。中学・高校、さらに前期授業で修得した基本的な英語運用能力を基盤に、大学生としての知的レベルに適応する発展的な能力の育成と強化を目指しています。本科目では、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの 4 技能をバランスよく伸ばし、英語の表現力と理解力を広げることが目的です。

今回の受講生は 51 名と、外国語授業としては人数が多く、授業内に個々の活動を丁寧に支援することは難しい状況です。また、入試形態からも、英語に苦手意識を持つ学生や、これまで英語を重点的に学んでこなかった学生の割合も多く、学力のレベル差が大きいことがわかります。このような現状において、専門性を支える礎を作る一般教養科目として、学生の知的好奇心と外国語運用能力の差にどのように対応し、多人数での授業を構成するかについて、日々試行錯誤を重ねながら、学生の活動の様子を見つめています。

今回の授業研究を通じて、自身の授業改善をするために、自身の授業の枠組みやアプローチをいくつかの観点から整理し、振り返りたいと思います。

授業の流れと構成

4つの大きな枠組み「復習と導入、新出事項の確認、練習、応用」の流れを意識し、一つのUnitに対して4週間程かけて、さまざまなタスクを入れるようにしています。今回の研究授業で扱った具体的な活動は次の通りです。授業内外で課される様々な活動が、最後のグループ作成の動画に反映できることを目指しました。



I Unit 6 Warm up & Review

- Self introduction and What's new? (自己紹介、自身の出来事を話し、書く)
- Unit 3 Vocabulary Review (前期に学修した語彙を英語の定義で復習する)
- Unit 6 Shadowing Practice (既習のListening教材を用いた発話トレーニングを行う)

II Unit 6 Listening 1 (教科書のListening教材の原稿を配布し、Reading教材として活用する)

- Review (前回行った内容と表現方法(数値の読み方)を確認する)
- Reading Practice (発表に向け、テキストを音読し、文字への依存度を減らす)
- Story Retelling (英文の一部を図表化したシートを元に、本文内容を再生する)

III Unit 6 Language Development

- Comparatives and Superlatives

(比較級、最上級の概念を再確認し、教科書の問題に取り組む。実際の使用事例から意味を確認する)

IV Unit 6 Video Project 練習

- “Before & After Special: Kio ECB ver.” の作成
(班で台本を自由に考え、英語でテレビ番組動画の一コマを作成する)



授業内容に対するアプローチ

研究授業では、「比較級」を文法項目で取り上げました。これは中学校2年生の学習項目で、大半の学生にとって「既知っている」内容です。そのため、単なる「おさらい」にとどまらないよう、言葉の「語源的な変遷」、「本質的な曖昧さ」、「実際の使用事例(例:看板など)」から比較概念を再考する試みを行いました。これにより、文法規則だけでは見えてこない文化的・歴史的な背景や言語の多様性に気づき、苦手意識を持つ学生にとっても言語を学ぶ楽しさを感じてもらうことを狙っています。

対面授業の特性をどのように生かすか

対面授業を行う意義は「人同士のやり取り」にあるとの認識の元、学生間の交流や発見を重視した授業設計を行いました。一例として、無作為で班を編成して座席を指定し、授業中のタスク達成度を「グループ責任」としています。また、褒める、訂正する、励ますといったフィードバックを公に行うことで、学生同士の連帯感を高めつつ、適度な緊張感を維持することを目指

しました。

多様な学力層へどのように対応するか

授業内の活動では、2～3 段階のレベル設定を行い、学生が自分に合ったタスクを選択できるように工夫しました。例えば、読解活動では「英訳を見ずに回答する」、「英訳(裏面印刷)を参照する」、「英訳(PC 上)を常に参照する」などの3段階での選択肢を示します。これにより、学生の取り組み姿勢に前向きな変化が見られるようになりました。しかし、取り組み時間差への対応が未だ課題として残っています。



検討会での協議事項

検討会では、技能指導の方法、授業内規律の確立、そして高等教育としての語学教育のあり方といったテーマについて授業に関する多角的なご意見を伺うことができました。多くの反省点もありますが、この過程を通して自身の授業を客観的に捉え直し、普段とは異なる視点から授業構成を再検討する貴重な機会となりました。このような場を提供していただいたこと、そして授業参観、動画視聴、検討会へのご参加など貴重なお時間を割いていただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

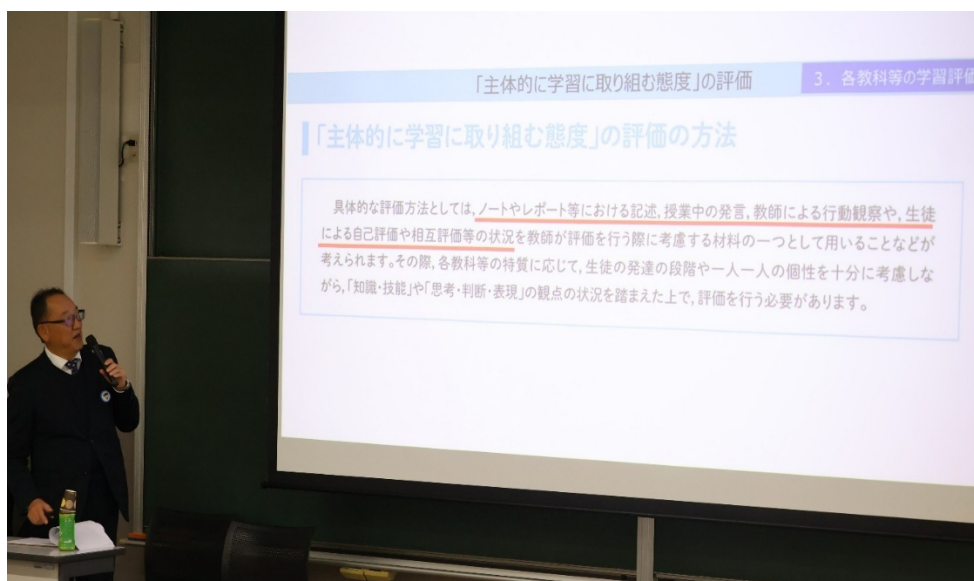
FD 研修会レポート

2024 年度 FD 研修会報告

『新学習指導要領における授業および評価方法の現状』

2025 年 2 月 13 日、(木)に本学教職員(非常勤教員を含む)を対象とする「FD 研修会」を開催しました。

今年度は「新学習指導要領における授業および評価方法の現状」をテーマとし、奈良県立高田高等学校教頭の奥村健夫先生、同教務部長の河辺有史先生にご講演いただきました。



高田高等学校様は、「自彊、和敬、創造」を建学の精神として堅実な教育実績を重ねてこられ、令和 5 年 8 月には「進学教育重点校」(奈良県教育委員会が「大学へ進学するための学習指導により力を入れ、難関大学への進学実績を向上させることに重点を置く高校」として指定する高等学校)に指定されています。以降、「カリキュラムの見直し」「45 分 7 限授業の実施」

「キャリア教育の充実」などの改革に取り組んでられました。

本学とは高大連携協定を結ぶ間柄であり、多くの生徒さんが本学に入学してくれています。

さて、文部科学省は「社会に開かれた教育課程」「育成を目指す資質・能力」「カリキュラム・マネジメント」「『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善」をポイントとする「新学習指導要領」を策定し、段階的に実施してきました。高等学校においては 2022 年度入学の高校生から実施され、それに基づく教育を受けた生徒の皆さんが 2025 年度から大学へ入学してこられます。「何を学ぶか」だけでなく「何ができるようになるか」という資質・能力の考え方と、「どのように学ぶか」を重視し主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を促進する方向性の中で、今の高校生がどんな学びを日々実践しているのかを知ることは、その生徒たちを迎える大学側としても不可欠なことといえます。

ご講演では、この「新学習指導要領」の実施も踏まえ、「単元テスト」「ICT を活用した授業」「総合的な探究の時間」などについて、高校現場で実際に展開されている事例を紹介しながら、動画も交えて分かりやすくお話しいただきました。

「単元テスト」の導入にあたっては、初年度(令和 4 年度)には各教科の希望を聞いてテストの実施日時を設定したところ、各教科がそれぞれのタイミングで実施することとなり、生徒への負担が増えてしまいました。そこで 2 年目(令和 5 年度)からは一定の期間に設定し、部活動等との兼ね合いも配慮しながら、生徒がメリハリをつけて学習できるように工夫されました。

また、「ICT を活用した授業」を通して日常的にプレゼンテーションや表計算ソフトを活用するようになるなど、生徒たちの意識には大きな変化が見られる反面、「ICT 機器を使うこと自体が目的になってしまっている」「教員間の ICT 活用能力の格差」等が課題となっているようです。



こうした新しい取り組みを導入するにあたって、生徒たちの学習効果を高めるために先生方が試行錯誤を繰り返しておられる様子や、それを受けて主体的・対話的で深い学びを実現していく生徒たちの活き活きとした表情は、とても刺激的なものでした。かつての「受け身の授業」とは全く違う高校現場での学びの姿が、そこにはありました。特に自らテーマを決めて調査・探究を進めていき、最終的にその結果をプレゼンテーションに結実させる「総合的な探究の時間」は、主体的・対話的で深い学びの促進を図る新たな教育課程を象徴するものと言えるかもしれません。とはいえ、ここにも「生徒が問題意識を持てず、単なる調べ学習になっていることがある」「教員同士の意思疎通の重要性、難しさ」等、いくつかの課題があることも示されました。

現場の先生方は、このような課題と真摯に向き合われながら、授業運営の方法だけでなく成績評価の公平性や多様化する生徒たちへの適切な対応など、よりよい授業を行うために日々模索しておられることもよくわかりました。

受講者からは、

- ・高校生はこちらが思っている以上にパソコン(ICT)を使いこなし、発表やプレゼンを行なっていることに気づかされました。
- ・複数の教員間での共有の難しさや、各教員の IT スキルに違いがある難しさが今後の課題かと思いました。
- ・探究活動や普段の科目においても、お互いに意見を出し合い理解を深めていく活動が多く行われていることは、主体性を育むためにも大切な活動であると思います。

等、さまざまな感想が寄せられています。

本学がこれから入学してきてくれる皆さんに充実した学びを提供し、それぞれの夢や理想の実現をサポートしていくために、知っておくべき多くの事柄を学び取る、大変有意義な機会になりました。

ご講演いただいた奥村先生、河辺先生、そして高田高等学校様には、改めて厚く御礼を申し上げます。

2024 年度 FD 活動報告

前 期

- 4 月 1 日 新任教職員研修会
- 6 月 26 日 健康栄養学科 研究授業(「栄養教育論実習」 宮前 眞智子)
- 6 月 27 日～ 前期授業アンケート実施
- 9 月上旬 前期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

後 期

- 10 月 29 日 理学療法学科 研究授業(「生理学実習」 西井 康恵)
- 11 月 18 日 人間環境デザイン学科 研究授業(「建築施工」 吉永 規夫)
- 11 月 19 日 現代教育学科 研究授業(「英語コミュニケーション B」 福島 玲枝)
- 12 月 17 日～ 後期授業アンケート実施
- 1 月 7 日 看護医療学科 研究授業(「慢性期看護学援助論 I」 山本 裕子)
- 2 月 13 日 FD 研修会「新学習指導要領における授業及び評価方法の現状」
(奈良県立高田高等学校 奥村健夫教頭、同校 河辺有史教務部長)
- 3 月上旬 後期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

*2025 年度の研修会等の日程は、決まり次第お知らせいたします。2025 年度も本学の FD 活動に対し、ご理解ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。